

小川源蔵『征露日誌』紹介と翻刻（その一）

小川 栄 一

『征露日誌』（架蔵）は、筆者の曾祖父小川源蔵が書き残した日露戦争の従軍記録等二冊である。小冊ではあるが、日露戦争や当時の歴史を研究する資料となりうると考えてここに紹介する。やや分量があるので、本編（その一）では紹介・解説、次編（その二）以降は注釈を加えた全文の翻刻を数回に分けて掲載する。

一 『征露日誌』の書誌

『征露日誌』一冊目は、縦一九・八cm、横一二・七cm、裏表紙に「歩十七ノ五 小川源蔵」と墨書があり、明治三七年（一九〇四）二月十日から翌年八月二五日までの従軍記録五八ページのほか、多くのメモ書きや、日露戦争の戦鬪ごとの戦死者数一覧、南満州鉄道の南関嶺からはるびえ哈爾濱までの駅名と里程なども記されている。二冊目は、縦一六・七cm、横一二・三cm、表紙に「征露日誌」、裏表紙に「明治三十拾八年十一月 征露式軍十一月 小川漁夫」と墨書がある。この年月は、最初に「明治三十拾九年十一月」と記したもので、その「九」を線で取り消して「八」に

書き直している（図版参照）。一冊目に続く八月二六日から一月九日までの従軍記録一四ページのほか、宣戰詔勅、勅諭写、日露講和条約ノ詔勅ヲ煥発、皇太子殿下御言葉覚書、御沙汰書写、満州軍総司令官大山巖、陸軍大臣寺内正毅、第二軍司令官奥保鞏の訓示（それぞれの写し）なども記されている。従軍記録の体裁は、一冊目には一ページに縦約三五字、横一四行、二冊目には一ページに縦約三〇字、横に一三行、それぞれ細字で端正に書き込まれている。初めて手にした時はさほどの分量とは思わなかったが、原稿用紙に転記すると従軍記録の部分だけでも四百字詰め八五枚になった。なお、一冊目の本文冒頭には「日記」、二冊目の表紙には「征露日誌」と記されている。全体のタイトルとしては後者がふさわしいと考えて、従軍記録全体の名称として『征露日誌』を採用する。

『征露日誌』には、源蔵の召集・入隊から始まって、実戦さながらの訓練、行軍、連隊本拠地からの出発と渡航、上陸地大連から戦地への移動、戦地に到着した後には、戦場における熾烈な戦闘、負傷兵の運搬、戦闘の後始末のみならず、各種式典の様子、恤兵品の受領、旅団解散式に至るまで、淡々とした筆致で、きわめて簡潔に書かれている。また、勅語、御沙汰書、第八旅団解散式の旅団長式辞、日本海海戦の新聞記事などの写しも載せられている。全体を通じて、一兵士の目線から見た戦争の実態が生々しく記録されている。苛烈な戦場のありさまはもちろんのこと、陣地の防衛工事、衛兵や偵察勤務、日々の訓練など軍務のほか、戦地に向かい戦闘に参加する心情、宿舎を提供した清国人との交流、内地の知人友人や留守家族との手紙のやりとり、内地からもたらされる様々な情報など、従軍生活の詳細が飾らない表現で記されている。『征露日誌』は一兵士の従軍記録として日露戦争の真実を究明するために有益な資料と認められる。

『征露日誌』とともに、『日露戦役記念のおたまき』（明治三八年一〇月。非売品。『おだまき』と略称する）と題した小冊子が保存されている。源蔵の所属した第二軍後備混成第八旅団歩兵第十七連隊第五中隊の編纂にかかると

ので、タテ約一八・九cm、ヨコ約二二・八cm、全六一ページからなる。内容は、宣戦詔勅、連隊長岩元貞英の序文、中隊長小笠原勇太郎の緒言、凡例、黒溝台会戦夜襲の歌、中隊歴史、従軍名簿からなっている。「凡例」によれば、復員解散の日に各自に分配する目的で戦地において編纂印刷されたもので、編纂は須貝久平少尉、印刷は神保直蔵軍曹の尽瘁とある。「中隊歴史」(同三八年一〇月三日調べ)には、三七年二月五日の動員下令から、休戦後の三八年九月二四日に施行された第二軍大招魂祭に至るまで、第五中隊の活動記録が簡潔に記されている。「従軍名簿」(同一〇月三日調べ)には現員、戦死者、負傷者、転入、転出、入院者などの氏名その他の情報が一覧されている。これらの情報等は軍の正式な記録に基づいて作成されたものと考えられ、源蔵自身も『征露日誌』執筆にあたって参考したに相違ない。両者を比較してみると記載内容に大きな相違や矛盾はないが、若干のくいちがいもある。ちなみに、従軍名簿現員之部(P.19)には「秋田縣平鹿郡朝倉村睦成一四八番地 歩兵上等兵 小川源蔵」の名が確かに記されている。

二 小川源蔵の略歴

小川源蔵は筆者の生まれる二十年以上前に物故している。軍服姿の遺影が残されているので、それから人柄が偲ばれる。父祖から伝え聞いたことは多くない。横手市役所に保管された戸籍の記載、小川家の墓誌などから判明することを中心に述べていく。

源蔵は明治六年(一八七三)二月二九日、秋田縣平鹿郡睦成村(現在、横手市)に住む小川定吉の二男として出生した。満十歳になった同一六年(一八八三)三月七日、同じく睦成村に住む小川チツの養子となった。小川家の

墓誌によれば、チツの夫専蔵の命日は旧暦明治一五（一八八二）年九月二日（新暦一〇月一三日）、チツの命日は同一六年四月二日（新暦五月八日）である。要するに、源蔵が養子に入った時点で専蔵はすでに亡く、それから二カ月余りで養母チツも亡夫の跡を追うように死没した。戸籍によれば、源蔵はチツ死没の日に小川家の家督を相続している。まだ年少であったことから、少なからず実家（小川定吉家）の支援があつたと想像される。戸籍によれば、専蔵には長男末治がいた。嘉永二年（一八四九）三月二四日生まれで、源蔵よりも約二四歳年上になる。戸籍には源蔵が養子に入る二年前の明治一四年（一八八一）九月一日に「脱走」と記され、十年以上過ぎた同二七年（一八九四）六月二〇日、北海道北見国紋別郡幌内村（現在の紋別郡雄武町幌内）に現在し、同年一月二四日、同村において分家とある。もちろん脱走から分家にいたる詳しい事情は戸籍にも記されていない。末治移住の二年前にあたる同一二年（一八七九）官営幌内炭鉱が開かれていることから推測すると、それに関連した職を求めて移住した可能性がある。以上より推測すると、専蔵の死没時に長男末治が脱走していたので、家の存続のため、チツは小川定吉家から二男の源蔵を養子として迎え入れたものであろう。なお、『征露日誌』にはたびたび肉親と手紙のやりとりをしている。この時期にはすでに養父母は死没しているから、「父上」とあるのは実父定吉のことに相違なく、「母上」、「兄上」、「妹」とあるのも実家の家族であらう。⁽³⁾

源蔵は二一歳の時に日清戦争に従軍している。当時の従軍日誌は残されていないが、従軍記章などが現存している。『征露日誌』明治三七年一二月一四日の記事に十年以前に金州に屯営したという記述があるのも、日清戦争の時のことと推測される。復員後、同三一年（一八九八）四月五日、二五歳の時、平鹿郡横手町上根岸町に住む堀内仁吉の長女トヨ（当時満十九歳）と結婚している。夫婦の間には、日露戦争出征前に長男源之助と二男源次郎が生まれており、復員後に長女サダ、三男三郎、二女キヨ、三女トミが相次いで生まれている。ちなみに筆者は源之助

の孫にあたる。

『征露日誌』によれば、日本がロシアに宣戦布告した同三十七年二月十日、源蔵は満三十歳で陸軍に後備兵として召集される。後備兵とは、現役（三年）、予備役（四年四ヶ月）を終了し、後備役（五年）に服した兵士のこと、戦時もしくは事変に際して召集された。源蔵の配属先は後備歩兵第八旅団⁵歩兵第十七連隊第二大隊第五中隊第三小隊第一分隊、階級は上等兵である。源蔵にとつて、かつて日清戦争での従軍経験はあるにしても、長らく軍務から離れて、一市民として職業をもち家庭を営み、年齢も高くなっている。軍務に就くことは本人にとつても家族にとつても大きな負担であつたに相違ない。

源蔵は召集から約九カ月間、連隊所在地の秋田で日々訓練を重ねた後、秋も深まる一二月一八日、秋田を出発して戦地に赴く。翌年一月下旬の黒溝台会戦、三月上旬の奉天会戦に参加して、ともに勝利をおさめる。その後、日本海海戦の大勝利を経て、九月五日講和条約調印の後、終戦を迎える。多くの戦友が戦場で倒れたが、幸運にも源蔵自身は負傷もせず復員した。なお、功績を称えられて、同三十九年四月一日、功七級金鷄勲章及び勲八等白色桐葉章を受賞している。

源蔵は大工をなりわいとした。すでに召集以前から齋藤万蔵、齋藤三蔵という大工の親方に弟子入りしていた。『征露日誌』にも「齋万、齋三兩親方」とたびたび登場し、手紙のやりとりも頻繁で、親しい関係であつたことがうかがわれる。源蔵の顕著な業績としては秋田銀行横手支店の新築工事に携わつたことで、大正一一年（一九二二）六月二五日付けの賞状が残されている。横手市内にある名利曹洞宗正平寺の建設にも携わつたと伝えられている。復員から二七年を経た昭和七年（一九三二）四月三〇日、源蔵は享年五九で病死した。当初は横手市内の共同墓地、現在は埼玉県越生町^{おこせ}の霊園に埋葬されている。

三 『征露日誌』の執筆

源蔵は戦争の体験を家族にもあまり語らなかつたという。戦場では悲惨なことが多すぎて冷静に語れなかつたものと推測する。『征露日誌』を執筆したのも、口では語りにくい従軍体験を家族や子孫などに書き残そうとしたからであろう。そもそも源蔵は戦地において戦闘や訓練などの合間をぬって、簡単な記録かメモなどを書いていたものと思われる。『征露日誌』は、戦争が終わり復員して後に、これらを基にして、文章をいろいろと練りながら執筆し、現存する冊子の形に清書したものと考えられる。戦地において『征露日誌』そのものを毎日書き記していたのではなからう。戦闘や訓練などが続き、露営することも多い戦地において、簡単な記録かメモならばともかくとして、『征露日誌』そのものを、本文の体裁を整えながら、落ち着いて執筆する時間の余裕も、心の余裕もなかつたと思われる。それだけでなく、本文中にもこのように推測される徴証がある。そのいくつかを指摘しよう。

まず、明治三八年二月五日、六日、七日の記事がその一例である。これらにはやや不審な点がある。それというのも、この三日間の記事がなぜか二度続けて記されているからである。両者の本文には若干の相違があるもの、書かれた内容はほとんど同一であって重複している。最初に書かれた記事を「初稿」、追加した記事を「改稿」と捉えて、左に本文を対照させる。問題にする箇所について初稿では実線、改稿では波線を付す。⁶⁾

初稿…五日、寒天。午前八時整列シテ、当村落ヲ撓シタル土煉瓦壁ニ銃眼ヲ穿ツ禦防地点ヲ築造シタリ。

六日、全。七日、前同断。

改稿…五日、寒氣甚ダシ。命令ニ依リテ、当宿営ノ周圍ヲ撓シタル煉瓦造リノ壁ニ銃ガンヲ穿ツ防禦工事ヲ施シタリ。

六日、七日モ、右同斷之作業ナリ。

源蔵の部隊は黒溝台会戦の後約二十日間、三尖泡という村落に宿営していた。その間、ロシア軍の再来に備えて、村の周圍に繞らされたレンガ造りの壁に銃眼を空ける防禦工事を行った。そのことを記したのがこの三日間の記事である。両者の相違点を指摘すると、初稿「寒天」を改稿「寒氣甚ダシ」、初稿「当村落ヲ撓シタル」を改稿「当宿営ノ周圍ヲ撓シタル」、初稿「土煉瓦壁」を改稿「煉瓦造リノ壁」、初稿「禦防地点ヲ築造シタリ」を改稿「防禦工事ヲ施シタリ」、初稿「六日、全。七日、前同斷」を改稿「六日、七日モ、右同斷之作業ナリ」などである。総じて改稿の方が表現が熟して理解しやすくなっている。ここで、源蔵が『征露日誌』を戦地で毎日書いていたとすれば、このような重複は通常起こらないのではないか。ましてこの記事の時期は激戦となった黒溝台会戦と奉天会戦との間であって、強い緊張にさらされた状態において、読者を意識してわかりやすく改稿するような余裕があったとは考えにくい。反対に、後日になって執筆したと考えれば説明がつきやすい。戦地における緊張から解放されて、一度書いた初稿をわかりやすく書き直すだけの余裕があったと考えられるからである。もちろん初稿を抹消すべきであったが、抹消する部分が多すぎて見にくくなるなど何らかの事情があつて、そのまま残したものであろう。その結果、初稿と改稿が併存して、内容が重複することになったものと推測される。

次は同年一〇月の記事であるが、これもまた不審である。

廿五日、(略) 佐々木末五郎君へ悔ノ状ヲ送り、(略)
 全廿七日、(略) 佐々木末五郎様ヨリ、亀吉ノ三笠艦ノ災難ノ節、死亡セシヲ報知セラレ。

一〇月二五日の記事に佐々木末五郎へ「悔ノ状」を送ったとあるのだが、それは亀吉の死亡を悼むものである。ここで、源藏がどのようにして亀吉の死亡を知ったかといえ、一〇月二七日に到着した佐々木末五郎の手紙に戦艦三笠の沈没により死亡したと記されていたからに他ならない。そうすると、源藏が亀吉の死亡を知る二日前に悔やみ状を出したことになる。本来の順序としては、源藏が亀吉の死亡を報じた佐々木末五郎の手紙が先で、源藏の悔やみ状が後でなければならない。このような混乱は、戦地で『征露日誌』を執筆していたとすれば起こりえないものである。戦後になって執筆した際に生じた混乱と考えれば納得がいく。混乱の原因は明らかでないが、時間の経過とともに何らかの記憶違いが起こったものと考えられる。

最後に奉天会戦のさなか同年三月六日の記事を指摘する。これは「六日」から始まる記事(初稿)に、「全日」から始まる同日の記事(改稿)を追加したものである。両者の記載内容には共通点が少ないので、一見すると別の日の記事のように思えてしまう。しかもなぜ改稿したのか理由が推測しにくい。(次の引用文中にある(1)、(2)などは筆者の加えたもの)

六日、(1)敵ハ其一部西方ニ退却スル模様ナルヲ、或隊ヨリノ報告ニナリ。(2)而、我隊ハ右翼隊ノ前進ヲ待ツ。並向シテ戦鬪スルノ命令ナリ。(3)故ニ、本日ハ達子宮ニ在リテ予備隊トナリテ、露营地ニアリツ、命令ヲ待チ居タリ。

全日、(1)未明ヨリ攻撃ヲナシタルモ、敵ハ要害堅固ノ堡壘ニ頼ミシ者ナレバ、守ルニ易ク、攻ムルニ最モ難シ。
(2)終日激戦致セ虽モ、其目的ヲ達スル能ズ。味方ハ少ナカラザル死傷ヲ出シ。(3)当日ハ、我大隊ノ半数ハ予備トナリテ、残念ナガラモ戦線ニ不出シ。他ノ勤務ヲ勉メリ。(4)日没ニ至リテ、我分隊ハ下士斥候トナリテ、小貴興堡ノ敵陣ヲ搜索ヲナシテ、七日午前二時帰隊シ、情況ヲ報告シタリ。

内容を整理すると次のとおりとなる。

「六日」から始まる記事（初稿）

- (1) 敵軍の一部が退却する模様という報告が他隊から入った。
- (2) 右翼隊と並行して戦闘せよという命令が出たので、その前進を待っていた。
- (3) そのため予備隊となって露営地の達子営で待機していた。

「全日」から始まる記事（改稿）

- (1) 未明から攻撃をしかけたが、敵軍は要害堅固の堡壘に籠もって守備が固かった。
- (2) 終日激戦となるが目的を達せず、味方の損害が少なくなかった。
- (3) 我が大隊の半数は予備隊となって戦場には出ず、他の勤務を行った。
- (4) 日没後、我が分隊は下士斥候となって敵陣を搜索し、深夜に帰隊して状況を報告した。

ほぼ共通するのは(3)と(3)'だけである。二つの記事に共通する趣旨は、当日は達子営において予備隊として戦場には出なかつたということである。(1)(2)と(1)'(2)'にはそれぞれ予備隊となつた事情が記されたものといえる。ところが、その事情が全く異なっている。初稿(1)(2)では、敵軍の一部が退却する模様という報告が他隊から入つたが、(まだ前進していない)右翼隊と並行して戦鬪せよという命令が出たので、予備隊となつて戦鬪をせず、右翼隊の前進を待つことになつたということである。改稿(1)'(2)'では、未明から攻撃をしかけたが、敵軍の守備が強固で味方に多くの犠牲を出し、敵陣を攻略する目的を達成できなかったため、拙攻を避けて予備隊となつた(待機した)ように読める。はたして、どちらが真実なのだろうか。実際この日に何があつたのだろうか。

すでに紹介した『おだまき』(P10)には当日の記事が記されている。「六日、達子営ニアリテ友軍ノ攻撃進歩ヲ待チ、同夜中隊ハ前哨トナリ警戒ニ従事ス」とある。この記事の前半(実線)は初稿(2)とほぼ共通し、後半(波線)は改稿(4)に共通している。『おだまき』の記事は正式なものであるから、予備隊となつた理由は、初稿(1)(2)「右翼隊の前進を待つたこと」が正しいことになる。改稿(1)'(2)'「戦鬪で目的を達成できなかったこと」ではなかつたのである。そうすると、初稿が正式な記録に合致しているにもかかわらず、わざわざ改稿して別の理由を書き加えたことになつて、ますます不審が深まる。

まず、当日何があつたのかを推測する。改稿の波線部「我大隊ノ半数ハ予備トナリテ」という記述に着目する。この記述から、源蔵の隊を含む大隊の半数は終日予備隊として待機していたが、未明から終日攻撃に参加した隊もあつたのではないかと推測される。そうすると、改稿(1)'(2)'「未明ヨリ攻撃ヲナシタルモ……味方ハ少ナカラザル死傷ヲ出シ」の内容は、攻撃に参加した味方の隊の記録と考えられる。その後、初稿(2)の命令、すなわち右翼隊の前進を待つてこれと並行して攻撃すべしという命令が出たので、源蔵の隊などは予備隊となつたものと推測される。

しかし、攻撃に出た味方の隊にはそのような命令が伝わらなかったのか、終日激戦を続けることになった。そして、改稿(4)のとおり、源蔵の分隊は日没後に斥候に出て報告した。以上が当日起きたことの一部始終であったと推測する。要するに、初稿と改稿の記事を合わせて当日の全体状況が明らかになる。

以上のことから、改稿の理由が推測できる。それは、初稿にはこの日他隊が激しい戦闘をしたことを記していないからである。これは前に引用した『おだまき』の記事も同様である。『おだまき』は源蔵の属する第五中隊の記録であって、第五中隊はこの日の戦闘に参加しなかった、まして他隊の戦闘のことが記されていないのは当然である。しかし、これでは少なからぬ死傷者を出した味方の隊の戦友が浮かばれない。これに気づいた源蔵は改稿を試みて、(1)'(2)'の事情を補足して、当日の出来事の一部始終をリアルに表現しようとしたのである。したがって、このような改稿についても、『征露日誌』を戦地で書いたとすれば起こりえないであろう。記事の対象の三月六日は、日露両軍が総力をかけて戦った奉天会戦の真つ最中である。当時の源蔵にとって、これだけ込み入った改稿を行う余裕があったとは考えにくいからである。

以上三例の検証から、『征露日誌』は戦地でのメモなどを基に日露戦争終了後に執筆されたものと推測する。次にその時期はいつかであるが、『征露日誌』の最終記事が明治三十八年一月九日であることから、この日以降であることは疑いない。また、『征露日誌』二冊目の裏表紙に「明治三十拾八年十一月 征露式軍十一月 小川漁夫」という墨書のあることもこれに符合する。ところが、既述のとおり、この年月は最初に「明治三十拾九年十一月」と記されたが、その「九」を取り消して「八」と書き直したものである。常識的に考えてみれば、明治三十八年中に「明治三十拾九年」と記すことはありえない。明治三十九年もしくはそれ以後になって記したものであろう。そして、「九」を「八」に修正したのは、前年一月九日が『征露日誌』の最終記事であったからと考える。そもそも明治三十八年

一月中旬に『征露日誌』の執筆を完了することは不可能であったと推測される。なぜかといえば、『征露日誌』一〇月二九日の記事から、源蔵は日露戦争終戦直後の十一月一九日以後に戦地の鉄嶺から列車で出発したことになったかと推測される。三八年一月中旬には執筆する時間はなかったであろう。これに加えて、『征露日誌』は小冊子とはいえ分量が多いので、文筆を専業としない源蔵にとっては執筆に相当の日時を費やしたことが考えられる。これらの事情から、『征露日誌』の完成は明治三九年もしくはそれ以後のことであつたろう。そうすると、最初の墨書「明治三拾九年十一月」がその有力な時期となる可能性もある。『征露日誌』の成立時期を以上のように推測する。

四 『征露日誌』の記事概要

『征露日誌』の記事の概要を一〇の時期に区分してまとめる。

1. 召集と秋田での訓練（1904.2.10—1904.11.17）

宣戦布告の当日、後備召集となり、秋田の後備歩兵第十七連隊に入隊。（2.10）

以後九カ月にわたり市内、県内各地にも行軍し、実戦さながらの演習など訓練に励む。

ついに出發命令が下り、部隊一同欣喜。宿舎では酒肴の馳走にあずかる。（11.16—17）

2. 秋田出発と大阪宿営 (1904.11.18—1904.12.6)

大勢の万歳に送られて列車で秋田駅を出発。(11.18)

奥羽本線、東北本線、東海道本線を経由して、大阪駅に到着。(11.19—21)

大阪でも訓練を行い、休日には大阪市内(11.22—24)、京都市内(11.28)を見物。

翌日の出発が急に告げられ、準備に追われる。宿舎ではこ馳走莫大。(12.6)

3. 戦地への進軍 (1904.12.7—1905.1.9)

大阪港まで行進し、阿波丸に乗船して出航。(12.7)

五日間の大洋航海を経て、清国青泥窪(後の大連)に到着。(12.11)

上陸して厳しい寒さを実感。ロシアの建設した銀行用建物に宿営。(12.12)

新たに支給された銃の使用法を研究。午後は市内見学などして過す。(12.13)

無蓋列車に乗って出発。車中、外套の頭巾を深くかぶるなどして寒さをしのぐ。(12.14)

海城、遼陽などを経て煙台駅に到着。招耳台まで徒步行軍して宿営。(12.15)

連隊本部の置かれた後八家子を経て小営盤に至り、ここで約一カ月宿営。(12.16)

村落後方に掩堡を構築する工事を始めるが、地面が凍結して難航する。(12.17—19)

寒気の中で訓練が始まり、衛兵勤務を行い、故郷に手紙を書くなどする。(12.20—31)

新年を迎えて天皇皇后万歳を三唱。宿舎の清国人と新年の宴を行う。(1905.1.1—1.3)

工作作業、衛兵勤務、訓練など。凍傷防止の講話。遠くから砲声が聞かえる。(1.4—1.9)

4. 営口方面の防衛（1905.1.10～1905.1.25）

早朝から銃声、正午には砲声轟々と聞こえ、両軍の衝突を推量する。（1.10）

敵軍の襲来した牛荘、営口付近の守備隊増援のため出発。遼陽から乗車、鞍山店にて露営。（1.11）

牛荘の敵軍は退却との報を受け、営口に向け出発。牛家屯にて警急舎営。（1.12）

営口に到着するも、敵軍は当地守備隊の反撃によって退却。営口付近の崔家房に宿営。（1.13）

村内で得た豚と馬で買い求めた酒をもって労をいやす。（1.14）

営口から乗車して海城で下車。付近の地に宿営。（1.15）

海城市街を見物の後、空寺院に転宿。当地守備の命令を受ける。（1.16）

海城より約六里余の金山堡で下士哨にあたる。当地の鉄道工夫らから歓迎される。（1.19—21）

帰還命令を受け、荒天の中、海城、鞍山店を経て遼陽に到着。（1.22—24）

黒溝台に敵来襲との知らせを受け、急速歩で旅団司令部のある大台に到着。（1.25）

5. 黒溝台会戦での激闘（1905.1.26—1905.1.28）

第一線となって進軍し、老橋付近の敵軍を撃退するが、十字砲火を浴びて前進を妨げられる。（1.26）

午後から前線に出る。前方の高地に陣取った敵軍から猛攻を受ける。（1.27）

午前、軍旗護衛隊。午後、機関砲、速射砲を使った猛攻を受けながら、老橋北方の敵陣を占領。（1.28）

夜襲の命令を受けて、わずかに残った戦友と覚悟を決めて集合。（1.28夜）

暗夜を無言で進み、敵軍の直前になって突撃し、黒溝台東北の陣地を占領。（1.28深夜—1.29 未明）

6. 黒溝台会戦の後処理 (1905.1.29—1905.2.18)

早朝、敵軍の退却を知り、ただちに黒溝台に侵入。三尖泡に移動して宿営。(1.29)

戦場掃除を行い、老橋付近の畑地を搜索して、戦死者の遺体を運搬する。(1.30)

第八師団長を通じて、黒溝台勝利を頌える勅語を賜る。(1.31)

宿舎清掃、防御工事、衛兵勤務などのほか、故郷との通信などいっ過ぎず。(2.1—16)

軍旗祭の準備を始めるが(2.17)、にわかに出発の命令が下る。(2.18)

7. 奉天会戦での激闘 (1905.2.19—1905.3.14)

三尖泡を出発し、狼道溝、前八家子、北演台を経て、金鴨子に到着。(2.19—21)

金鴨子から潜伏斥候に出て敵情を捜り、夜明け方に引き上げる。(2.23)

砲兵隊が発砲、双方撃ち合いとなる。敵兵の夜襲を一撃で撃退。(2.27)

大武鎮営の敵軍から攻撃をうける。敵弾の降る中、第一大隊に連絡する。(3.3)

大武鎮営から退却する敵兵を追撃し、大きな損害を与える。(3.4)

達子営を焼き払って退却する敵兵を追撃、達子営を占領。(3.5)

予備隊となって達子営に留まる。日没後に前方小貴興堡の敵情を探る。(3.6)

小貴興堡を守る敵軍の機関砲に苦戦、死傷者が増え、突撃に失敗。(3.7)

友軍の迫撃砲の発射とともに突撃、剣劇に及んで敵兵退却。小貴興堡を占領。(3.8)

砂嵐で視界の利かない状況で前進し、古家子付近で鉄道の見視に当たる。(3.9)

三家子付近の小村に進軍。奉天陥落の知らせを聞く。(310)

渾河^{えんが}を渡り、奉天南郊の十里馬頭に進軍。洋書店子に移動してロシア軍の作った土穴に宿営。(311—14)

8. 奉天入城と招魂祭 (1905.3.15—1905.4.22)

大山総司令官を奉天南門外に出迎え、兎玉参謀長らと共に奉天に入城。(315)

穴屋の屋根改造のためにアンペラを徵発に出かけ入手する。(323—25)

後備歩兵第三十一連隊の招魂祭に参拝。(326)

渾河の仮鉄橋架設工事のため各中隊より二〇—二五名ずつ出動。(327)

奉天城内へ行軍を兼ねて進み、城内を見物散歩。(328)

後備歩兵第十七連隊の招魂祭。祭文朗読、仏祭、参拜式。飾り物、相撲、芝居見学。帰舎後は酒宴。(48)

9. 鉄嶺方面への前進 (1905.4.23—1905.7.22)

洋書店子を出発し、前民屯に進軍し宿営。(423)

前民屯を出発。李七堡子、高坎、榆樹堡を経て鉄嶺県大台に到着し宿営。(55—59)

敵兵襲来の急報により烏巴海に向け出発。近隣を偵察、防御工事を行う。(520—23)

内地から送られた新聞の号外によって日本海海戦大勝利を知る。(68)

大台を出発。遼河の軍橋を渡って孤家子に到着し宿営。(69)

折からの長雨や炎暑に困惑しつつ、来るべき戦闘に備えて演習を行う。(610—)

10・終戦と旅団解散式 (1905.7.23—1905.11.9)

天皇よりの御沙汰書に講和交渉開始のことを触れる。(7.23)

孤家子を出発して、双楼台に到着し宿営する。(8.8)

第二軍司令部のある古城堡において第二軍招魂祭施行。(9.24)

中隊長より、講和条約の批准、戦争終了が知らされる。(10.18)

来たる十一月九日に鉄嶺より鉄道輸送開始の通報がもたらされる。(10.29)

勅語奉読、陸軍大臣等の訓示朗読に続いて、分列式施行。(10.30)

第八旅団の観兵式、分列式、解散式施行。(11.3)

孤家子の歳貢生王毓琪より帰国土産に用いる書作品を購入。(11.6)

『征露日誌』の最終記事。(11.9)

五 源蔵の白露戦争従軍

源蔵にとって白露戦争は日清戦争に続く二度目の従軍である。戦地に到着して約一カ月後、極寒の大地を舞台に壮絶な黒溝台会戦に参加する。以下、『征露日誌』の記事によりながら、源蔵の従軍について詳しく述べる。

黒溝台会戦に至る経緯を明治三七年の夏に遡って説明していこう。満州に派遣された日本軍(満州軍)は四つの軍に編成されていたが、そのうち旅順の攻略にあたった乃木希典大將率いる第三軍を除き、主力をなす他の三軍はそれぞれのルートでロシア軍の拠点遼陽を目指して進撃し、これを破る(遼陽会戦)。ところが、度重なる激戦によつ

て将兵の死傷者は増加し、物資の補給も追いつかず、砲弾は底をついていた。一方、ここまで戦闘のたびに後退を続けてきたロシア軍であったが、ついに反撃に転じ、一〇月中旬、迎撃する日本軍と、遼陽と奉天の間を流れる沙河^カの付近で戦う（沙河会戦）。ここでも日本軍は勝利するが、すでにロシア軍を追撃する余力がなくなっていた。その後は日露両軍合わせて三五万の大軍が沙河の線で対陣するうちに、厳しい冬が近づいてくる。

この間、札幌の第七師団と弘前の第八師団^⑧は本土防衛のため国内に留められていた。戦地の兵力が消耗してくと、大本営は第八師団を戦地に投入することとした。その派遣先をどこにするか、現地の日本軍は旅順方面を要望した。しかし、防御を固めた旅順要塞の攻略には二万人余りの死傷者を出しており、第八師団を旅順攻略に投入しても従来どおりの戦法では無駄になくしてしまう、新鋭の兵力を奉天方面へ続々と送り込むロシア軍との間で兵力の均衡を失う恐れがあるとして、大本営は九月下旬遼陽方面への派遣を決定した。^⑨この間、源藏の属する後備歩兵第十七連隊は、秋田およびその周辺において、実戦を想定した演習を含む厳しい訓練を重ね、兵士たちは戦意を高揚させていた。待ちに待った出発の命令が下ると、一月一八日に秋田を列車で出発し、しばらく大阪に滞在後、一二月七日に出航、同一日には清国の青泥窪（後に大連と改称）に上陸した。その後、列車や徒歩行軍で戦地に進み、小営盤という村落に宿営する。それでも年内には戦闘がなかった。

ところが、年が明けて数日過ぎると、源藏の宿営地にも毎日遠くから砲声が聞こえるようになる。ロシア軍が反撃を開始したのである。そもそも日本軍の布陣は左翼が弱点となっていた。歩兵軍団の左端に接する李大入付近から兵站部のあった小北河付近に至る四〇km余りの戦線に、司馬遼太郎の長編歴史小説『坂の上の雲』でも有名な秋山好古^{よしふる}少将率いる騎兵隊約八千人などが配置されるのみであった。この状況をロシア軍も把握していた。手薄な日本軍左翼に大軍で攻撃をしかけて突破できれば、背後に回り込んで日本軍を包囲し、一挙に殲滅できる可能性がある

る。それにもかかわらず、日本軍総司令部はロシア軍が厳冬期に軍事行動を起こすとは予想していなかった。ロシア軍にとって大地も凍てつく厳冬期こそ軍事行動を起こす好機である。一月九日からミシチェンコ中将率いる総勢約一万人の騎兵団が日本軍の左側を南進し、一日には日本軍兵站部のある牛荘、翌二日には港湾都市の営口を襲撃してくる。現地の守備隊は必死に防御するが、牛荘は一時占領される。ところが、この状況になっても日本軍総司令部はロシア軍の動きを単なる偵察行動と見なし、大部隊による攻勢の前触れとは考えていなかった。⁽¹⁰⁾

このような中で、一日源蔵の属する後備歩兵第十七連隊に営口方面防衛の命令が下る。現地に向かう列車の中でも敵軍と衝突する恐れから弾薬が支給されるなど、一気に緊張が高まる。しかし、二日後に営口に到着してみると、守備隊の反撃で敵軍はすでに撤退した後だった。源蔵の隊はやむなく金山堡付近で鉄道線路の警戒にあたる。とはいうものの、鉄道工夫など現地の日本人にしてみれば友軍の到着は心強く、源蔵の隊も歓迎される。しばらく滞在した後、二三日には帰還の途に就く。

二五日に宿営予定地の前八家子に到着すると、伝騎が急に駆けて来る。前日より黒溝台にロシア軍が襲来したという。黒溝台とは中国東北部を流れる渾河の左岸（東南側）に位置する村落で、種田支隊（騎兵中心の隊）が布陣して守りを固め、新たに後備歩兵第三十一連隊などが応援に入っていた。黒溝台の部隊はロシア軍の攻撃を数回にわたって撃退したが、ロシア軍が次々に兵力を増強してくると防ぎきれなくなっていた。⁽¹¹⁾ 源蔵の隊も黒溝台救援のため急速歩で前進し、旅団司令部のあった大台に到着する。この局面において、この方面の防衛を任された第八師団の司令部は黒溝台の種田支隊などに退却を命じる。⁽¹²⁾ 一時的に占領されてもロシア軍は黒溝台から出て来るであろうから、それを攻撃すればよいと考えたからである。しかしながら、ロシア軍は黒溝台に留まって防御を固めた。⁽¹³⁾ ロシア軍の動きは日本軍の左側背を衝こうとする本格的な攻勢であって、同日夜には黒溝台東北方にある沈旦堡に

も大部隊が攻撃をしかけてくる。黒溝台方面に襲来するロシア軍の規模は日本軍の予想をはるかに超えていた。

このような危機において、二六日には源蔵の隊にも前線への出撃命令が下る。これまで全く戦闘の機会がなかった源蔵にとつては初戦となる。今度こそ戦功を上げるチャンスとばかり喜び勇み、第一線となつて黒溝台との中間地点の老橋方面に戦闘隊形で前進する。そして敵の前哨線と遭遇するや、激戦の末これを撃退し、一陣を占領する。さらに前進すると、今度は猛烈な十字砲火が待ち受けていた。源蔵の隊はここで多くの負傷者、戦死者を出す。しかも指揮官の連隊長、中隊長、小隊長、分隊長までもが負傷する。負傷したまま凍傷にかかる者も多かった。結局その夜は占領した老橋に戻つて露営する。このようにして、両軍の激戦は三日間にわたつて続けられた。源蔵も連日戦場に出撃し、また、負傷した戦友の後送や弾薬の運搬にあたることもあつた。

これまで敵情を軽視していた日本軍総司令部であつたが、前線からの報告によつて戦況の悪化を知ると、慌てて三個師団を追加投入する。三日目（二八日）になると、これらの師団も加わつて攻撃の態勢が強化される。ロシア軍は機関砲や速射砲などを使つて攻撃してくるが、源蔵の隊は奮進を続け、頑強に抵抗する敵陣を一つ占領する。しかし、そこからの前進は困難を極め、まだ黒溝台の奪回には至らない。その夜、全軍に夜襲攻撃が命令される。ここに至つて源蔵も覚悟を決める。源蔵の分隊でわずかに残つた四人の戦友と乾パンを食し、執銃帯剣の出で立ちで出発する。闇夜の中、雪の降り積もつた大地を隊列を組み肅々と進んで行くと、敵軍からは猛烈な射撃をうける。源蔵らは反撃することなく無言のまま前進を続ける。そして、敵前五〇メートル以内になつて一斉に突撃する。その勇猛さに恐れをなしたロシア兵は慌てふためいて退却する。左右の敵陣からは乱射されるが、すぐに黒溝台東北にある丘を奪取する。その後、防御工事にとりかかり、それが終了する頃には夜が明ける。

ところが、翌朝になると偵察隊から驚くべき報告が入る。なんと黒溝台付近のロシア軍は未明に退却し、すでに

人影がないというのである。源蔵らもすぐさま黒溝台に入るが、ロシア兵は一人残らず渾河の対岸に退却した後であった。前夜、ロシア軍総司令官クロパトキン大将は、いたずらに損害が増え、沈日堡方面の攻撃が成功しないため、攻撃部隊に退却を命じていたからである。¹⁵このように、黒溝台会戦はあつけない幕切れとなった。

この会戦における日本軍の犠牲は甚大なものであった。山田朗、大江志乃夫¹⁶によれば、日本軍の投入兵力五万三千八〇〇人、戦死一八四八人、負傷七二四一人、生死不明二二七人、源蔵の属する後備歩兵第八旅団は戦闘参与人員五三一人、戦死三一五人、負傷一六二八人、生死不明三一人、損耗率三七・二%に達したという。『征露日誌』一月二八日の記事によると、源蔵の小隊でも当初の七〇名が夜襲の集合時には僅かに一四名であったという。同三〇日、源蔵が掃除のため戦場に戻ってみると、兵士の死体が無数に取り残されている。ロシア兵の死体は日本兵の倍であったという（山田朗によれば、ロシア軍の死傷者は一万一七三二人）。源蔵は戦死者の運搬などをしながら戦闘の激しさを改めて実感する。しかし、喜ばしいことには、会戦に従事した将卒の功績を嘉する勅語をたまり、立見尚文師団長の賞詞にもあずかった。後備歩兵第十七連隊に対しては、別に師団長より感状が付与されている。これらの榮譽は源蔵にとつてもうれしかったに相違ない。

同年三月には、両軍総力をかける決戦となった奉天の会戦にも参加する。源蔵の部隊は奉天南方の敵陣を一つずつ攻略して前進を続ける。激戦の末ここでもまたロシア軍は撤退し、奉天は日本軍の手に落ちる（その詳細については本文に譲る）。光栄なことに、源蔵は大山巖総司令官、児玉源太郎参謀長らと共に奉天入城を果たす。その後、源蔵の部隊は後退したロシア軍を追って、前民屯、大台、孤家子にまで進軍する。この時期になると大規模な戦闘は行われなくなり、源蔵は緊張感を覚えながらも訓練を続ける日々であった。そのさなか、内地からの手紙により、東郷平八郎大将ひきいる連合艦隊が五月二七、二八日の日本海海戦においてバルチック艦隊に大勝利したという新

聞報道に接する。

これで日本の勝利が決定的になると、アメリカ大統領セオドア・ルーズベルトの仲介で、八月には日露の終戦交渉が始まる。そして、九月五日に日露講和条約（ポーツマス条約）の調印、一〇月一四日の批准を経て、一年八か月にわたる日露戦争は終結する。その結果、日本は南樺太の領有権、関東州の租借権、南満州鉄道の管轄権を獲得する。また、条約の取り決めによって両軍ともに満州から撤兵することとなり、一月三日、源蔵の旅団は解散式を執り行う。『征露日誌』の記事も一二月九日が最終で、その後のことは記されていない。同月下旬から帰国の途に就いたものと推測される。翌年一〇月二二日に長女サダが出生したことから逆算すると、三八年末から三九年初めまでには復員したものと考えられる。

六 『征露日誌』から知られること

『征露日誌』には一兵士の見た戦争の実像が飾られることなく記されている。簡潔な筆致であるだけに、戦場の緊迫感がひしひしと伝わってくる。整然と隊列を組んだ行進、敵軍からのすさまじい銃砲撃、砲弾の降り注ぐ中で突撃、慌てふためいて逃げ去る敵兵、その情景が目につかぶようである。さらに、戦闘にそなえて日々繰り返される訓練、凍てつく大地の塹壕掘り、重い弾薬の運搬などのほか、零下三十度以下での衛兵勤務、闇夜の中で敵陣をうかがう偵察、傷ついた戦友を深夜に野戦病院まで運ぶ困難など、軍務の厳しさは想像に余る。食料補給が充分でない時もしばしばあって、乾パンだけの食事や、携行食がなく空腹をかかえて行軍することもあった。宿営地においても室内の不潔さや劣悪な飲料水を始め、生活環境への不満なども記されていて、その労苦が思いやられる。

それでも、与えられた任務を忠実に実行しようとする、東北人の辛抱強さ、真摯な態度がうかがわれる。その一方、慰労のために酒、タバコ、菓子などがしばしば支給され、その酒などを使って兵士仲間と宴会を開くこともあった。また、軍主催のさまざまな式典も盛大に行われる。新年の祝賀と両陛下万歳三唱、奉天入城式、招魂祭、分列式、解散式などである。招魂祭では、各隊から飾り物を出したり、相撲や芝居などの余興も行われる。兵士にとって気の休まるひとときであったろう。内地との手紙のやりとりも頻繁であった。源蔵の主たる相手は、郷里の家族や友人、仕事仲間、宿営地の主人、負傷して帰国した戦友などである。手紙の内容まで記されることは少ないが、さぞ源蔵の心を慰めたものであろう。

『征露日誌』を読んで筆者が着目するのは、軍隊生活における源蔵の経験や見聞である。秋田の寒村に生まれた源蔵にとって、軍隊生活そのものが学びの場でもあった。訓練や戦闘の合間を縫って、名所見物に出かけている。大阪、京都、大連、奉天などである。これら国内外の由緒ある大都市の見学は、源蔵にとって歴史や文化に触れる好い機会ではなかったかと想像される。また、内地の人々に宛てた手紙の中で、源蔵自作の和歌や漢詩を記したのもある。和歌には戦死を免れて生き残った申し訳なさなども詠まれ、漢詩には国を守る兵士としての意気込みが表現されている。日露戦争に従軍した大山巖、児玉源太郎、乃木希典など教養ある軍人は戦地でも戦争を題材にした漢詩や和歌を作っているが、このような嗜みが一般兵士の間にも広がっていたことがうかがわれる。

宿営地の人々（日本人、清国人）などとのふれあいは、源蔵にとって軍務の緊張をなごませて人情の温かみを感じるものであったと推測される。そのような日本人とは、戦地においてもたびたび手紙のやりとりをしている。また、清国人とのほほえましく心温まる交流に関する一例として、明治三十八年一月二日の記事を引用する。

全二日、晴天。兼テ買ヒ求メシ品ト、支給セラレシ酒肴ヲ以テ、朝食后ヨリ料理ニ係リ、正午ヲ以テ酒会ヲ始メ、当舎主ヨリ（土民）、菓子、砂糖等、数山ニ送ラレ。之レ日本ノ新年ニ対ス、年始ノ礼ナル者ナリ。依テ、舎ノ主人ヲ始メ、皆呼ビ招キテ、酒餅等ヲ馳走シタリ。舎主モ大ニ喜ビ、我々ニ向テ厚情ナルヲ謝ス。「日本飯々好好くく」ト。我々一同ハ酒モ次第二醒テ、或ハ歌、或ハ手舞等、実ニ愉快ヲ尽シタリ。

この時、源蔵の隊は小営盤という村落に宿営していた。元旦に新年の宴会を行うのが本来であるが、衛兵勤務にあたった仲間の兵士もいたことから、翌二日に行われたものである。清国人の主人から菓子や砂糖の差し入れがあり、彼らを招いて酒や餅などでもてなし、歌や手舞などで実に愉快なひとときを過ごしたという記事である。主人の中国語「日本飯々好好」（日本の食事はとてもおいしい）の意。発音は Riben tantan haohao）まで記されている。戦地にいる緊張から解放されたひととき、和やかな、にぎやかな、楽しそうな様子を彷彿とさせる。実は小営盤に宿営を始めた当初、警急舎営（警戒しながら宿営すること）の心構えで滞在せよといわれていた。この村民は心をロシア兵に傾ける模様があるというのである。しかし、それは杞憂であった。約二週間の宿営を続ける間に宿の主人などと相当に打ち解けていたことがわかる。一月十日の記事では、主人よりたくさん豆腐を贈られ、副食物が不足する中で都合がよかったとあり、「実ニ土人タリトモ、久シク同居シタル為、我家ノ人ト思ヒ、朋友ノ交ニナリ、互ニ厚志ヲ以テ交換シタリ」という感想を述べている。翌日の出発にあたっては、「宿舎ノ主人其他ノ家族ニ、長々世話ニ預リシ挨拶ヲナシテ出発シタリ」とまで書かれている。これらの記事から、源蔵や仲間の兵士たちが清国人とも深く心を通わせていたことがうかがわれる。源蔵は、秋田や大阪からの出発前日に滞在先の宿から盛大に酒食のもてなしを受けていた。日本人も清国人も情の深さは変わらないと思つたことであろう。

旅団の解散式も終わり、帰国を目前にした一月六日、かつての宿营地孤家子の歳貢生である王毓琪という人物を訪ねて、帰国土産に用いる書作品を書かせたという記事にも着目したい。毎日頭條¹⁷⁾によれば、王毓琪(1869-1938)という人物は、開原県慶雲堡西孤家子出身の学者、医者、教育者であつて、一八九六年に開原県の貢生¹⁸⁾になり、『開原縣誌』、『榴城遊行記』、『秋衣書懷』などの著作があるという。『征露日誌』の記事から想像するに、王毓琪は孤家子において客の求めに応じて書作品を作成していたのであろう。源蔵も和歌や漢詩の創作を嗜んでいたこともあり、王毓琪のような文化人から得た刺激は小さくなかつたものと思われる。

このように、『征露日誌』には、秋田の一青年が戦場で命をかけながら、その一方で海外経験をし、現地の人々とも交流し、国際交流の機会をもつたことも記されている。日露戦争への従軍は、戦闘などの軍務のみならず、各地を見学して見聞を広め、戦友や現地の人々と親しくふれあうなど、源蔵の人生観にも大きな影響があつたに相違ない。こうした観点からも『征露日誌』を読むことができるであらう。

- (1) 明治三八年一月一六日付けの詔勅「日露講和条約ノ詔勅」を換発(発布)する旨の文書で、端書きの二行と詔勅とからなっている(源蔵の筆写)。詔勅原本(国立公文書館デジタルアーカイブによる)と照合してみると、字句に若干の異同がある。
- (2) 「脱走」という語はおだやかでないが、『日本国語大辞典』(ジャパナレッジ)によれば、「仲間から抜けること」という意味もあつて、福沢諭吉『文明論の概略』(一八七五)五・九「藤吉は唯百姓の仲間を脱走して武家の党に与みしたるなり」、久野豊彦『ポール紙の皇帝万歳』(一九二七)「僕は文学を脱走して、現にいま、郵便配達夫なのだ」(傍線筆者)などの例が掲げられている。小川家戸籍の「脱走」もこれと同様の意味で、要するに「移住」のことであらう。
- (3) 源蔵の養父専蔵や実父定吉に関する戸籍がないか横手市役所に問い合わせたが現存しないという。小川家の菩提寺、浄土宗傑作山桃雲寺(横手市上内町)にも当時の過去帳が残されていないか問い合わせたが、手がかりはつかめなかつた。
- (4) 金州とは遼東地域の中心として栄えた城郭都市で、現在は大连市金州区となっている。日清戦争中の明治二十七年一月、日本軍は

- 清国軍の立て籠もる金州城を攻撃し占領した。
- (5) 後備歩兵第八旅団は、後備歩兵第五連隊、同第十七連隊、同第三十一、同第三十二連隊から成り、明治三十八年六月には後備混成第八旅団に改編されている。
- (6) 本文の引用にあたっては、底本にない句読点を適宜施し、仮名には必要に応じて濁点を施す。底本では基本的に旧漢字を用い、当時通用の略字体なども用いられているが、すべて現行の新字体に統一する。読みにくい漢字には適宜振り仮名を（ ）に入れて施す。これ以外の例についても同様である。
- (7) 戦艦三笠は連合艦隊司令長官東郷平八郎大将の旗艦として、旅順港の封鎖、日本海海戦などに参加したが、同年九月一日、佐世保港・泊中に火災により爆発を起こして沈没し、多数の死傷、行方不明を出す大惨事となった。その後引き上げられ現役艦として復帰したが、現在は記念艦として横須賀港に保存されている。
- (8) 第八師団は日本陸軍の師団の一つで、青森県弘前市に司令部を置いた。第五連隊（青森）、第十七連隊（秋田）、第三十一連隊（弘前）、第三十二連隊（秋田）などから構成された。源藏の所属する後備歩兵第八旅団もその管轄下に置かれた。
- (9) この間の事情は沼田多稼蔵『日露陸戦新史』P.108（岩波新書版〈岩波書店 昭和十五年一月〉）による。初刊、兵書出版社 大正十三年三月）、谷壽夫『機密日露戦史』P.518以下（明治百年史叢書 原書房 昭和四十二年二月）に詳しい。なお、満州軍は引き続き旅順方面への師団派遣を要請したため、第七師団が旅順に派遣され、二〇三高地の攻略にも参加した。
- (10) この間の事情は中岡弥高『黒溝台会戦に於ける第八師団』（偕行社 昭和四年一月）P.27に詳しい。この文献は国立国会図書館デジタルコレクションにも収められていて、閲覧可能になっている。 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1223970/1/27>
- (11) 中岡文献 P.34 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1223970/1/31>
- (12) 中岡文献 P.39 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1223970/1/33>
- (13) 大江志乃夫『日露戦争の軍事的研究』（岩波書店 昭和五年一月）P.341.
- (14) この間の事情は前掲沼田文献 P.168、谷文献 P.524以下、大江文献 P.340以下に詳しく。
- (15) 別宮暖朗『日露戦争陸戦の研究』（ちくま文庫 筑摩書房 平成二十三年一月）P.221.
- (16) 山田朗『世界史の中の日露戦争』（戦争の日本史 20 吉川弘文館 平成二十二年四月）P.158、大江文献 P.342.
- (17) 台湾のニュースサイト。 https://knews.cc/history/piv8agp.html#google_vignette
- (18) 貢生（歳貢生とも）とは、当時の最高学府国子監に選ばれた成績優秀な学生のこと。

